

## 序 バブル／デフレ期の日本経済政策（時代証言集）

本書は、内閣府経済社会総合研究所（ESSRI）の研究プロジェクト『バブル／デフレ期の日本経済と経済政策』の歴史分科会オリジナルヒストリー・ワーキンググループが作成した19本のオリジナル・ヒストリーを取りまとめたものである。

オリジナルヒストリー・ワーキンググループは二つのグループに分かれてインタビューを行った。第1のグループには松島茂（東京理科大学大学院教授）と中村尚史（東京大学社会科学研究所教授）が参加して、「バブル・デフレ期の企業経営からの教訓」をテーマに、6人の企業経営者からインタビューを行い、6本のオリジナル・ヒストリーを作成した。本書の第1部は、それらを所収している。第2のグループには竹中治堅（政策研究大学院大学教授）と原田泰（大和総研専務理事チーフエコノミスト）が参加して、「バブル・デフレ期の経済政策に関する意思決定プロセス」をテーマに、13人の政治家、大蔵官僚、日本銀行関係者等からインタビューを行い、13本のオリジナル・ヒストリーを作成した。本書の第2部は、それらを所収している。それぞれのオリジナル・ヒストリーの内容については、第1部、第2部の解題をお読みいただきたい。

歴史研究において、歴史記述と並行して意識的にオリジナル・ヒストリーが用いられたのは、おそらくこれが初めての試みであろう。バブル／デフレ期という変化の時代の中で企業経営者、経済政策の決定に関わる政治家、大蔵官僚、日銀関係者がそれぞれ、環境や状

況をどのように捉えて、どのように決断し、行動したのかというプロセスは、文書記録の形ではなかなか残りにくいものである。これを明らかにするためには、当事者に対するインタビューによって、記憶しているところを語っていただき、それをオリジナル・ヒストリーとして記録に残すという方法が有効である。

もちろん、事実と記憶、また記憶と発言が常に一致しているとはかぎらない。往々にして記憶はあいまいであり、当事者がそうであってほしいという願望、そうであるべきであるという意思が発言にバイアスを与える。しかし、その事象に関与している複数の当事者のオリジナル・ヒストリーを重ねることによって、このようなバイアスを取り除いて、立体的に事実に向き合うことが可能になる。

今回のプロジェクトでは、幸いにして多くの方々の協力をいただいて機微にわたるお話を伺うことができた。これによって、バブル／デフレ期の企業経営、経済政策に関する意思決定プロセスを描くことができたのではないかと思う。インタビューとして参加した4人のワーキンググループのメンバーを代表して、ご協力をいただいた皆様に御礼を申し上げる次第である。

歴史資料分科会・オリジナルヒストリーワーキンググループ座長代理

東京理科大学大学院教授 松島 茂

歴史資料分科会・オリジナルヒストリーワーキンググループ委員

政策研究大学院大学教授 竹中治堅